

米原歴史文化街道

米原市の歴史・文化財を歩く 94

龍神信仰と雨乞い

— まいばら水の歴史③ —

蛇と龍は水の神

辰年から巳年にかわりました。蛇(巳)は、脱皮を繰り返して生命が更新される不思議さ、一撃で敵を倒す猛毒などが尊崇され、さらに頭部の外形が男根に似ることから子孫繁栄の神となり、とぐろを巻く姿が円錐形の美しい山容に見立てられて山の神となります。農耕社会では野ネズミの天敵として稲作の神に転じ、仏教と結びついて龍になり「水の神」となります。

米原市には、伊吹山と霊仙山という水の神を祀るふたつの霊山があります。

伊吹山は、縄文時代から神の棲む山として敬われていたようで、山麓の遺跡からは、祭祀に関係する石棒などの石器が県内屈指の質と量で見つかっています。また、古代神話の英雄ヤマトタケルを退け、死に至ら

しめた荒ぶる神の棲む山として『古事記』(七十二年)や『日本書紀』(七

二〇年)に登場します。この物語では、伊吹の神は白い猪や大蛇となって登場します。猪は多くの子どもを産むことから、縄文時代には豊穡祈願や子孫繁栄の神であり、弥生時代になると、豊作祈願の神となって山から里へ迎えられます。蛇は、前述のとおり水神です。このことは、山麓に豊穡をもたらす水分の神が伊吹山の神の姿であることを明確に物語っています。伊吹山四ヶ寺のひとつ長尾寺(天久保)の縁起には、伊吹山頂に八

大龍王の筆頭「難陀竜王」が棲んでいることが記されています。伊吹山の神は山麓の伊夫岐神社(伊吹)に祀られ、ここを水源に開鑿された「出雲井」は、大原庄(米原市大原学区)および郷里庄(長浜市北東部)一帯の水田を潤し、水の神として厚い信仰を集めています。

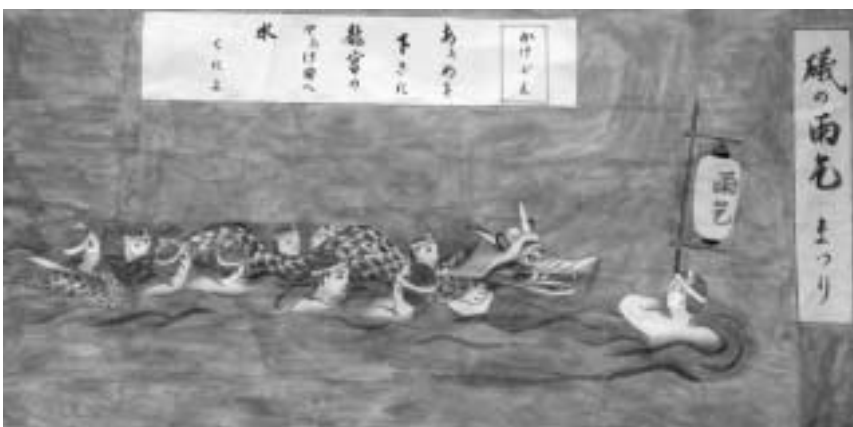
伊吹山や霊仙山は石灰岩地で、山中に独特のカルスト地形が発達し、ドリーネという窪みに水がたまって池になっているところがいくつかあります。霊仙山中には、「龍神池」「お虎が池」「尼が池」「本池」「権現池」や登山道沿いに霊仙神社の鳥居が建つ「お池」などがあり、これらの池は龍神信仰や雨乞い行事と深くかかわっています。そしてこれらの池から浸透した雨水は、山麓各地に豊富な湧水を供給することから、霊仙山の神も水の神ととらえることができます。このほか、竜神や竜王の棲む山として、水竜山(柏原)、龍宮山(番場)などがあります。

蛇を舞わす

磯には蛇まわしという雨乞い祭りがありました。蛇頭にペンガラを塗りつけ、目と角に金紙、頭の上の宝珠と尾の宝剣に銀紙を貼り、厚手の天竺木綿で幅一・五m、長さ一〇mばかりの胴体を作り、うろこを描いた蛇を社殿に供えたあと、境内を練り歩きながら琵琶湖に入り、降雨を祈願しました。蛇頭が納めてある木箱には「文久元年(一八六二)」の年号があり、江戸時代後期には舞わされていたようです。梅ヶ原にも「ジャ(蛇)さん」があり、これは、カマ

首をもたげた白蛇を襦袢に写し描いたもので、板にまかれて桐の櫃に収められているそうです。明治く大正にかけても三回ほど干ばつの際にジャ(蛇)さんに雨をお願いしたそうで、二時間後くらいに雨が梅ヶ原だけ降ったと伝えられています。多和田・日光寺・顔戸でも、ワラで蛇を作り、太鼓や鉦をたたいて雨乞いが行われました。

(歴史・文化財保護室)



▲ 磯の雨乞いまつり